

10、融合医療系の医学部づくりを拓く

～『ガン真相と終焉』の出版記念を期して～

地域科学研究会 / 高等教育情報センター
代表 青野 友太郎

本書の書評については、既に先輩姉兄が論展されておられますので、小生は別の視点からアプローチいたします。日本の高等教育に40年余伴走してきた立場から、「融合医療」「統合医療」「東洋医学」に立脚した「大学医学部」と「附属総合病院」の創設をささやかに提言して参りました。本書の出版記念を期して、改めて、ご参画の各位に直言申したく存じます。

我が国で大学新設・学部増設を実現するためには、文科省の大学設置・学校法人審議会の審議を経ることを要し、新たな分野での「設置認可」による挑戦が難しいことは、ご高承のとおりであります。

1983年に開学した明治鍼灸大学は、認可に際して、専攻分野の教育課程と教員の審査を担当する医学専門委員会をなかなかクリアできませんでした。当時、大学設置審議会会長でおられた浅田敏雄氏（東邦大学学長）が豪腕にも専門委員の交替を図って、設置に至ったのでした。

今日においても、カイロプラティック分野の大学学部設置は叶わず、専門学校においても、東京都は認可しておりません。

しかしながら、現在の設置審査法令において「届出設置」という方式があり、既設の医学部が医学分野を拡張するシナリオであれば、ハードルが低くなり、可能性が高まります。

広瀬輝夫氏（元ニューヨーク医科大学教授／元日本医療経営学会理事長）を囲む会合が、来日時に国際文化会館で開かれておりました。

小生は、T女子医科大学とT医科大学とM薬科大学とM国際医療大学との協働事業として、W大学に新医学部を設置する私案を提言しておりました。W大学のT総長は、就任時に同大学の悲願である「医学部設置」について言及されておられます。

小生は、ステップとして、伝統あるT医科大学に融合医学科（仮称）を設置し、W大学には、同分野の研究所と図書学術センターを創設する。ジャンプとして、W大学に同学科を移管して融合医学部（仮称）を設置するシナリオを提言したいと存じます。

2020年代以降の世界の医学・医療・介護・健康の諸課題の解明と解決を拓くグローバル大学のフロントランナーへの提言を、W大学T総長氏にしたいと思いをします。

本出版記念会にご参画各位の賛同と支援を念じております。(2021.11.1)

地域科学研究会 高等教育情報センターHP <http://chiikikagaku-k.co.jp/kkj/>

[追記]

小生が1970～80年代にご縁をいただいた森下敬一氏と多田政一氏の全著作は、是非とも上記の図書館に収蔵し、先行研究業績として活用したいと存じます。

森下氏は1950年東京医大卒業。血液生理学専攻。千葉大で医学博士。70年にお茶の水クリニック開業とともに自然医学運動をスタート。『ガンは恐くない』『最強の自然医学健康法～こうすれば病気は治る』ほか多数の著作。

多田氏は1935年東京帝大動物学科卒業。大脳生理学専攻。30年代「綜統医学連盟」代表、40年代後半に伊豆畑毛温泉に「綜統学院」創立。「第三民主同盟」委員長。米・加・独各国の国際アカデミーから理博・哲博の名誉学位。『綜統医学原論第1巻～3巻』『医学の革命と人間性の改造』『食と性による人間性の改造』ほか多数の著作。